

外来がん化学療法に用いられる経口抗がん剤の処方動向

杉山 純子¹⁾、齋藤 翔太²⁾、田中 美幸³⁾、佐藤 展宏⁴⁾、前田 守⁵⁾、長谷川 佳孝⁵⁾、
月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

- 1) 株式会社インファーマシーズ アイン薬局 豊橋東店
- 2) 株式会社インファーマシーズ 幸生堂調剤薬局 松栄店
- 3) 株式会社インファーマシーズ エイト薬局 あすか台
- 4) 株式会社インファーマシーズ
- 5) 株式会社インホールディングス

【目的】「患者のための薬局ビジョン」では、高度薬学管理機能の発揮が薬局薬剤師に求められており、外来がん化学療法に対する知識取得は急務である。特に、日々進歩する経口抗がん剤の処方動向を把握することは重要な意味を持つ。本研究では、保険薬局での経口抗がん剤処方の応需状況を調査し、外来がん化学療法に用いられる経口抗がん剤の処方動向を調査した。

【方法】2017年1月～2019年10月に当社薬局598店舗が応需した処方箋37,918,955枚を対象に、YJコードで「腫瘍用剤」に該当する経口抗がん剤について、ホルモン療法剤、代謝拮抗剤、分子標的薬およびその他の抗がん剤に分類して処方回数を集計した。

【結果】3分類の経口抗がん剤の処方状況は、全期間を通じてホルモン療法剤、代謝拮抗剤、分子標的薬の順に多く、2019年10月の全経口抗がん剤処方に対する割合は、それぞれ55.1%、27.4%、15.9%であった。ホルモン療法剤の割合は全期間を通じて変化がなかったが、代謝拮抗剤は2017年1月(30.9%)から減少傾向、分子標的薬は(11.3%)増加傾向であった。分子標的薬については、男性では全期間を通じてチロシンキナーゼ阻害薬が最も多く、次いでマルチキナーゼ阻害薬であった。女性でも2017年1月は男性と同傾向であったが、2017年12月からCDK4/6阻害薬、2018年4月からPARP阻害薬の処方が増加し、2019年10月はチロシンキナーゼ阻害薬、CDK4/6阻害薬、マルチキナーゼ阻害薬、PARP阻害薬の順となった。

【考察】外来がん化学療法に用いられる経口抗がん剤は、全期間を通じてホルモン療法剤が半数を占め、代謝拮抗薬が減少して分子標的薬が増加する傾向を確認できた。分子標的薬は、代謝拮抗薬などとは異なるメカニズムで副作用が生じることも知られている。薬局薬剤師は外来がん薬物療法に用いられる経口抗がん剤の動向を察知し、使用薬剤に合わせた高度薬学管理を発揮できるよう研鑽を続けることが重要と考える。

(第30回医療薬学会年会(2020年10月, Web開催)にて発表, 一部要約)